

NEW TRADITIONAL PAPER



NEW TRADITIONAL PAPER

2020-2021

福祉と伝統工芸とともに、
これからのものづくりを考える

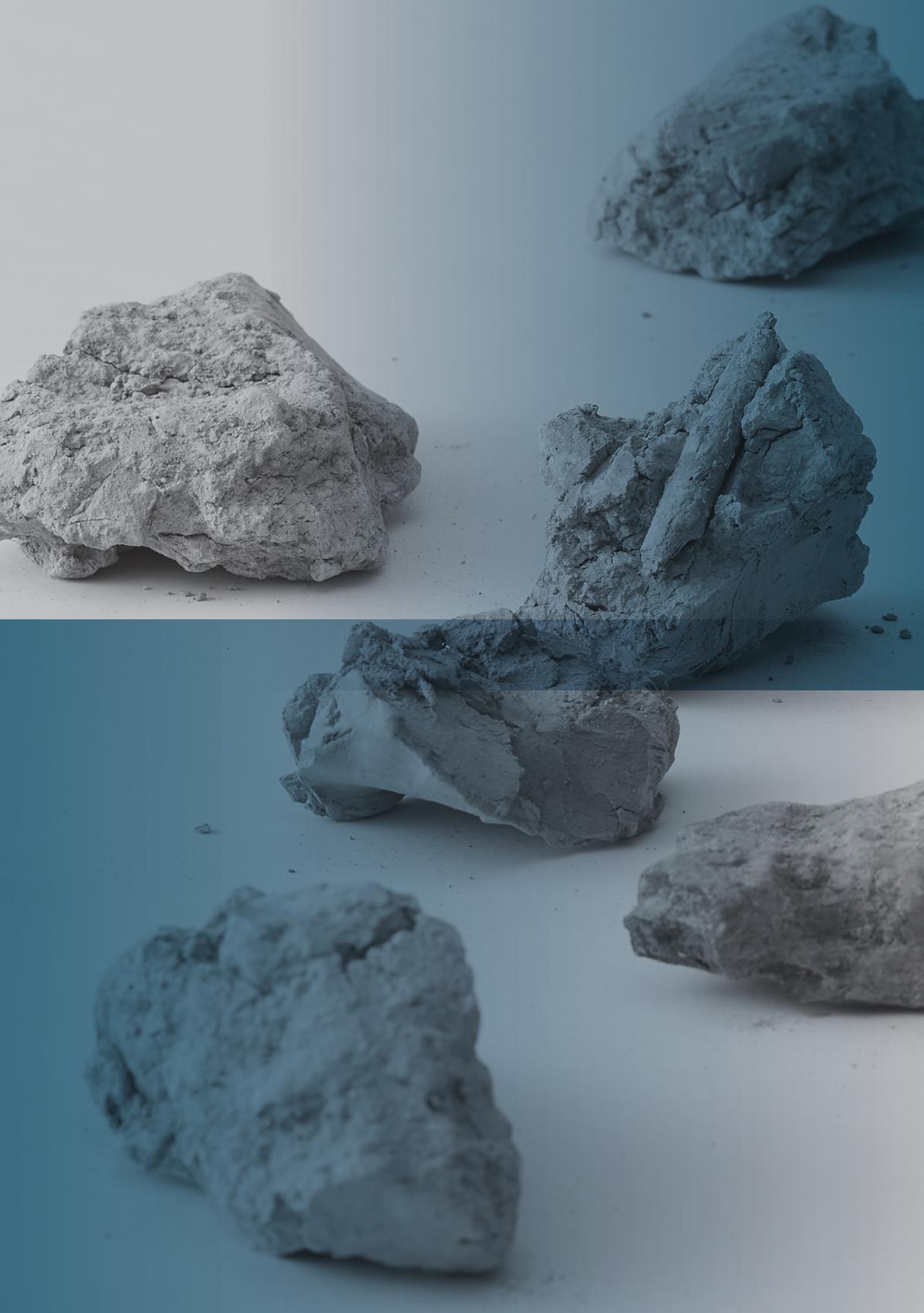
人が古くから続けてきた、ものをつくるという
当たり前の行為を、つくり手や使い手、環境、
素材、持続性など、さまざまな視点・立場から
見直す動きが、各地で生まれています。

そんななか、福祉×伝統工芸の可能性に着目し、
新しいものづくりのあり方や伝統工芸の可能性を
模索していくプロジェクト「NEW TRADITIONAL
(以下ニュートラ)」に取り組んできました。

各地の工房を巡り、ものづくりの担い手と対話
を行う「リサーチツアー」や、桑を植え蚕を育て、
繭から糸をひくまでを手仕事とする「お蚕さん
プロジェクト」。外部のディレクターとともに個人の
まなざしから新たなニュートラを発見する「わ
たしのニュートラ展」、使い手や伝え手、研究者ら
との意見交換など、調査や実践を通して、これか
らのものづくりに取り組むうえでの多くの刺激を
もらいました。

多様な人と関わり合いながらものをつくる
過程において、道具やそれを使う手つき、素材、
環境などへの向き合い方を話し共有しながら、
形を起こすこと。わたしたちは、そのようなもの
づくりの営みのなかにこそ、新しい伝統の芽が
あることを予感しています。

本誌は、ニュートラの実践のなかで培われた
思考や言葉、イメージを発信するメディアです。
これからの伝統とは何か。ものづくりのあり方と
暮らしはどう関わるのか。いろいろな人たちと
一緒に、考えていくことができれば幸いです。



NEW TRADITIONALを見出す 土地の歴史・文化・素材に触れ、



photo: Natsumi Kitagawa



01

伝統的なものづくりの現在を探究するべく、2020年10月から12月にかけて、各地のつくり手を訪ねるリサーチツアーを実施。たんぼぼの家のスタッフや福祉施設に携わるアーティストとともに、ものづくりの現場を訪ねた。産地の文化や素材に触れるなかで感じたことを、Good Job!センター香芝の森下静香が綴っていく。

※リサーチツアーは、日本財団の助成により実施しました

鯉江明さんのアトリエ (愛知県常滑市) 01 水野製陶園ラボ (愛知県常滑市)

ツアーコーディネートをお願いしたデザイナーの高橋孝治さんとホテルで待ち合わせ、最初に案内してもらったのはホテルの屋上から見える常滑のまち。なだらかな丘の反対側にはポートレース場、その向こうは海。ここでつくられた陶製品が船で運ばれ各地に渡ったことを教えてもらい、これから2日かけて巡る土地の奥行きを体感したような気持ちになる。常滑は、1,000年続く日本六古窯のひとつ「常滑焼」の産地であり、高度経済成長期には土管の生産で栄え、現在はタイルや衛生陶器の生産拠点として知られる。高橋さんにはメーカーから卸問屋、作家の工房まで幅広く案内いただいた。なかでも印象に残るのは、天然にある陶芸家・鯉江明さんのアトリエ、そして建築家の水野太史さんが運営する建築陶器メーカー水野製陶園のラボだ。

車窓の外のセラミック工場や土・石が積まれた資材置き場を眺めながら移動する。常滑は工房やメーカーが近い範囲に点在するまちだ。竹林に囲まれた鯉江さんのアトリエに到着し、庭に案内

してもらい、促されるまま雑草を押し分けると、足元には剥き出しになった粘土質の地層がある。これが常滑の、生の土の姿だ。「素材を知り尽くしている人が形をつくる」、高橋さんは鯉江さんの作品を見ながら言う。アトリエには、焼成前のさまざまな器が並んでいた。この後、父・良二さんと築いた薪窯で焼き上げるそうだ。鯉江さんは地域の人が裸足で土を踏み、感触を楽しむワークショップなども行っている。自然のなかの土も端正な皿になる土も同じであることが新鮮に思えた。

翌日は水野製陶園へ。広大な敷地にトタンの工場棟や陶製ブロック造りの事務所が立ち並んでいる。創業は1947年。水野さんいわく、戦後、高度経済成長期の建設ラッシュによる最盛期を経て工業化しながらも、「やきもの」の風合いにこだわりながら、機能的なレンガ・タイルを生み出してきた。2014年に始動したラボでは、そのやきものについての基礎技術の高さに可能性を見出し、オーダーメイドの陶製品を手がけている。棚や壁にはタイルの色見本が並び、豊かな色合いや光沢、釉薬が織りなす独特の模様是一片一片に浮かんでいる。手のひらに収まるものから大きな



photo: Hiroshi Kondo

空間をつくること。障害のある人とそんな挑戦もできるのかもしれないとわくわくした。

尾州のカレント 新見本工場 (愛知県一宮市) 02

12月上旬、織物の一大産地・尾州へ。コーディネーターは、長年、織物と障害のある人の仕事をつなぐ活動に携わるNPO法人motifの井上愛さん。数週間前、「とにかく本気の人たちが集まるサークルがある」と、電話で教えてくれたのが尾州のカレントだった。聞くと、メンバーは地元繊維企業の若手社員。週に一度集っては、産地の魅力発信のためのアイデアを交換し、ものづくりに挑んでいるという。

名古屋から車で1時間ほどかけて一宮へ。カレントの拠点・新見本工場のある木玉毛織株式会社に向かう。尾州には、産地の最盛期に建てられたノコギリ屋根の機屋が至るところにあり、カレントの拠点も木玉毛織の機屋跡を間借りした形だ。場内には生地見本や製品、ワークスペースが整い、ショールームとも部室とも言えるような雰囲気漂っている。

「日本に洋服が普及して100年。いまが一番の危機かもしれない」と代表の彦坂雄大さん。新型コロナウイルス(COVID-19)は繊維産業にも大きな影響を与えている。それでも「本当に必要な服の生産や流通のあり方を考えるチャンス」と語る姿には、産地の未来を担う覚悟が滲んだ。彼らの活動軸は、「まずは触れてもらう」ことにある。なかでも「びしゅうの〇〇」は、季節や場面に合わせてメンバーが上質な布を選び、協力工場で縫製することで日常的に着られる服を

提供する企画。このとき見せてもらったのは、ウールやジャカード織りのズボン。彦坂さんに生地の特徴をうかがいながら、気づけば、その場にいる全員が注文していた。

お蚕さんプロジェクト(奈良県香芝市)

帰路、車窓から見える山並みを眺めながら、ものづくりの根にある素材を育む産地のあり方や形にするつくり手のことを振り返った。

GoodJob!センター香芝(以下、GJ!センター)がこの3年取り組む活動に「お蚕さんプロジェクト」がある。GJ!センターを利用する障害のある人たちとともに桑を植え、お蚕さんを育てている。作業室を清め、日本在来種の小石丸を迎え入れるのは6月。はじめはケシの実のように小さいお蚕さんが桑の葉を食べ、日に日に大きくなるのは不思議で愛おしい。毎日葉をあげ、その成長をみんなで見守った。養蚕はお蚕さんの命をいただく営みでもある。自分たちの手でさなぎの入った繭を煮て、糸をひく。お蚕さんの供養のために、京都の蚕ノ社(木嶋神社)や葛城市の棚機神社へお参りに行ったことや、お蚕さんのうたをつくったこともあった。思えばこうした歩みも、私たち自身の自然との関わり、広くは生き方をとらえ直す旅のようなものかもしれない。

各地で出会った実践者の手や態度から、自分たちの足元にこそ、ものをつくるきっかけや伝統を育む地盤があると気づかされる。今後も、地域にある素材や歴史、文化をものづくりに生かし、現代の暮らしへとどうやってつないでいくかを考えていきたい。■

足下にある素材の 豊かさが、 わたしたちの アイデアとなる

インタビュー：高橋孝治

デザイナー・高橋孝治ディレクションのもと、2021年1月に開催された「わたしのニュートラ」展。高橋は、2016年から拠点を愛知県・常滑に移し、製陶業に関わる仕事をしながら、2017年より六古窯日本遺産活用協議会のクリエイティブディレクターに着任。常滑焼を含む1,000年続くやきものの産地を見てきた。また、同時期に地元の福祉施設との協働をスタート。そんな彼が考える、ものをつくる上での新しさ、そして伝統とは何だろうか。

photo: Hidenao Kawai

収録：2021年1月31日(日)、2月1日(月)
場所：INAX ライブミュージアム 土・どろんこ館(愛知)

自身の役割を見出し、 新しい点を打っていく

—「NEW TRADITIONAL (以下、ニュートラ)」という言葉の意味や可能性を議論する本プロジェクト。ニュートラと聞いてどんなことを考えましたか？

僕の仮説としては、ニュートラって「人」だと思っているんです。どういうことかという、例えば、常滑の朱泥急須。これは、ひと昔前から暮らしの定番アイテムになっています。その背景には、この急須を最初に仕掛けた人がいる。江戸時代中期頃から中国から滑らかな土を使った茶器(朱泥急須)が日本へと入ってきたんですが、そこで、常滑陶業中興の祖といわれる鯉江方寿が中国の文人・金士恒を招聘し、独自に研究していた地元のつくり手たちに当地の工法を伝習させた。方寿はその後、土管を発明し量産を指揮して、広く日本の近代化にも貢献しています。この人こそ「ニュートラ」ですよ。産地におけるものづくりの文脈に、質の高い点を打つことで、それが現代の産業にまで連なっている。

—「質の高い点」とは、次代に響くもの・ことをつくること。それを仕掛ける人こそニュートラだと。

そうです。「新たな点」を打ち、それが形式・様式化され、あるものは伝統工芸として受け継がれながら、さまざまな人の暮らしに浸透していく。僕がデザインをするときに考えているのも、同じ視点です。常滑を拠点にしていると、方寿のように質の高い点を打った人たちが過去にいて、それによって産地が成り立ってきたという大きな流れがくっきりと見えます。そこでどんな新しい点が打てるか。

—常滑におけるものづくりの文脈に、自身の立ち位置を見出しているわけですね。高橋さんの、ものをつくる前提のひとつはそこにある。

常滑がやきものの産地として現在まで持続できたのも、その時々ニュートラが数世紀ごとに点を打ち、新たな様式を築いているからこそだと思います。僕はそれを1,000年続く窯元のある産地＝六古窯に関わるなかで強く感じました。時代の要請に産地が応える、ある種の節操のないものづくりによって成り立ってきた部分もある。そんなことを考えながら、今回の「わたしのニュートラ」展では、新たな形式・様式を生み出していこう人たちに関わってもらいました。

土と向き合い、“つくる”を発見する

—「わたしのニュートラ」展では、常滑の福祉施設のメンバーや企業、つくり手との協働が、濃き紙やタイル、染布などのテストピースや商品になりました。プロジェクトが始動した経緯を教えてください。

2017年から常滑市社会福祉協議会の仕事を受けて、「就労支援施設での地産商品の開発」というミッションをもらったのがきっかけです。「福祉」の領域にも少し入り込んで進めたいと思い、2018年からは週一で「ワークセンターかじま」に勤めはじめました。デザイナーとはじめて仕事をする人が大半で、僕自身も福祉や就労支援施設のことをよく知らないこともあって、この3年ほどは、ものをつくりたり絵を描いたりして利用者の人たちやケアスタッフと関わり合い、お互いのことを知っていくような期間でした。そんな地道な関係づくりを進めていたからこそ、今回の「障害のある人の表現と伝統工芸の相互発展」というニュートラのコンセプトと展示のお話をいただいたとき、正直お受けするか迷

いました。じっくりとできないまま煮詰まっていなものを“良く”見せるようなことはしたくなくて。ただ同時に、自分が暮らす地域のやきもの仕事と、福祉の関わりに接点を見出したいという思いもありました。

プロジェクトに踏み切ったきっかけは、ワー

クセンターかじまの環境整備で、敷地に転がっていた電纜管(ケーブルを保護するための陶器)を利用した柵づくりでした。常滑のあちこちで、土管や焼耐瓶などやきものの不良品を再利用しているのを見ていて、「よし」って。でも電纜管は60cmくらいあるんですが、めちゃくちゃ重たい。柵を支えるにはもっと軽くて小さい東石で十分でしたが、それを基礎として据えるため、同じくらい穴を掘りました。そうしたら粘土層に当たったんです。思わず、施設長の桜庭さんに「粘土出ました！」と報告しましたよ(笑)。今回の展示に参加してもらった陶芸家の鯉江明さんにも土を見せたら、「うちの土と似てる」って。そのときに、施設でとれた土を素材にものをつくっていくのは面白い!と、商品のアイデアや利用者さんと楽しくものづくりをするイメージが湧いてきて。この体験を思い返すなかで決心がついたんですね。

—身近なところに、ものをつくるきっかけがある。

そう思います。僕自身、ここ数年はディレクターやコーディネーター業が続いていて、プロダクトデ



わたしのニュートラ展では、朱泥急須と土、土で染められた知多木綿がセットで展示された

photo: Shungo Takeda

ザインの仕事をほぼしていなかったので、粘土が出て自分で「つくりたい」欲求を無視できない状況になったのも良かった。あと、鯉江明さんのお父さんと、陶芸家の鯉江良二さんに一度門前払いを受けた経験も大きいです。というのも、六古窯のプロジェクトで生前の良二さんにインタビューする機会があって。真っ先に「(やきものを)掘ったことあるか?」と聞かれたんですね。「ないです」と答えたら「出直してこい」って。後日、明さんに連れられて知多半島をめぐり、いろんな場所で土に触れた経験は僕のなかですごく大事。良二さんにもあらためてその経験を報告して、取材できたんですが、彼らから学んだのは、考え方だけでなく目の前にある「素材」からクリエイションがはじまっているということ。ものの形に目を向けてきた自分にとってショッキングなことでもありました。

産地に共有されているものを、見える形にしていく

「素材」に目を向けると同時に、大前提としてあるのが地球環境への配慮。科学が進んで地球の資源が有限だとわかったいま、ものをつくる人に求められる最低限のエチケットですよ。それをふまえ、時代に合ったつくり方で未来に投げかけるものを



photo: Shungo Takeda

ワークセンターかじまの敷地で掘り出された粘土

をつくる人こそ重要だなと。ニュートラの展示に関わるみなさんもそうですが、例えば六古窯のひとつ、備前焼のつくり手・木村肇さんもそのひとり。

— 本誌(p.16)にも、木村さんのワインカップとすり鉢、スパイスミルが入っていますね。

一見突飛なアイデアに感じる焼き締めワインカップも、ジョージア発祥のワインが素焼きの瓶で仕込まれ、同じく素焼きのカップで飲まれていたことになっている。それを踏まえてワインをつくっている人が現代にいるんだから、その人たちのワインを受け止めるものも素材に近い焼き締めでいいんじゃないかという発想ですね。加えて話すと、「備前焼」は岡山県の伊部地区

— 備前焼発祥地域の粘土を使い、薪窯で焼いたやきもののことを指しますが、江戸時代から高価な茶道具として重宝されてきた歴史があります。いまでは、限られた資源を見越してつくる量を抑えつつ単価を上げ、窯元やつくり手自身が直売している。それを価値のあるものだと使い手が考えて購入しているんですね。僕はそんな備前焼(の状況)を、近代の工業化を経て生産量

や規模が膨らみ過ぎた産地の、淘汰されたあるべき姿のひとつとして見えています。木村さんは、備前焼の先人がつくったルールや質の高い点を咀嚼しつつも、ワインカップのように伝統を更新するような仕事をされている。この人はニュートラですよ。

— いまの時代に合うやきもののあり方を探りつつ、もともとどう扱われていたのかを俯瞰して考えている、ということですよ?

中世まで遡って、そのときのユーザーは誰だったのか、もしかしたら神様だったんじゃないか。そういうことを妄想しつつ、いま何が可能かをもものをつくりながら示しているように見える。繰り返しになりますが、木村さん含めたニュートラたちから僕が学んだのは「素材」との向き合い方です。形はどうあれ、その土地の土でつくられているとか、素材の物語が内包しているものにこそ魅力を感じていて。やきものは、土地そのもの

のになる前の土や、染め上がった土の色など、目の前にある素材の豊かさを見せているんです。

— 会場でもおっしゃっていましたが、新しいことはしていない。

そうですね。展示会に

来てくださった陶業関係者のみなさんも、土で染まると色が落ちないというのは日常的に実感していて、それを福祉施設との取り組みのなかで用いたことを評価してくれました。産地では、特に言う必要もないほど当たり前で共有されている知識だからこそ、今回のようにあらためて見える形にしたことで、「土で染める」っていうことが逆に新しく見える。例えば、昔の家屋はすべて自然素材でできていて、その土地でとれる土を壁などに塗り込んでいることが当たり前でした。そうした昔の人たちの営みは、いまでは途切れてしまったように見えますが、それらを素材と向き合っつつなぎ直すことが、新しい点を打つこと、ひいてはニュートラへと導いてくれるのかもしれない。■



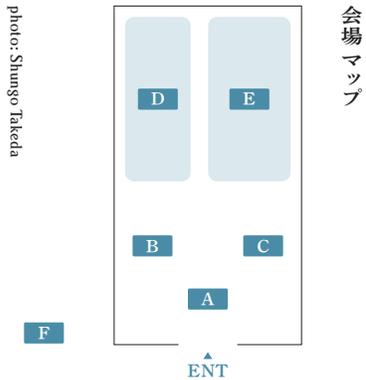
たかはし・こうじ
株式会社良品計画の生活雑貨部企画デザイン室を経て、2015年に愛知県常滑市に移住。常滑を拠点に企業や団体とプロジェクトを進行。2016～2018年、常滑市陶業陶芸振興事業推進コーディネーター。2017～2019年、六古窯日本遺産活用協議会クリエイティブディレクター。



“My New Traditional Collection” selected by Koji Takahashi
陶製釘／柶器、陶製タイル 水野製陶園製／柶器、陶製ドアノブ Rosenthal 製／柶器
photo: Shungo Takeda

Installation View

photo: Shungo Takeida



ワークセンターかじまの敷地で掘った粘土／常滑の土、やきもの、土で染めた布

素材となる陶土、素材から生まれたやきもの、素材で染めた知多木綿を1組に、常滑のものづくりを紹介。土練機で押し出されたタイル用土や、大壺のために足練りされた田土など、成形・焼成前の陶土の状態を会場へ持ち込み、土の持つ色味や質感と製品を見せる展示となった。

やきもの／陶土：甕(山源陶苑製)／工場で精土された赤土、常滑大壺／常滑の田土の足練り、便器(LIXIL製)／衛生陶器の土(泥)、タイル(日本モザイクタイル製)／タイル用土(丸安製)、朱泥急須(梅原タツオ作)／朱泥土 布：知多木綿 文晒(陶土染め)

ワークセンターかじまの制作記録／利用者さんたちとつくった試作



2020年5月の粘土発掘からはじまり、はじめての陶土染め、新年の土づくり、紙漉きワークショップ、タイルメーカーとの協働などをまとめた記録写真を展示。撮影は、常滑でデザイン事務所を営む河合秀尚さん。ほかにも、それぞれの取り組みを通してつくられたテストピースも展示された。

敷地から粘土が出てくるなんて思ってもみませんでした。粘土が出てきても、私たちだとやきものに直結してしまうんですが、染めたり漉いたりといった発想は高橋さんだからこそだなあと感じました。普段利用者のみなさんは、黙々と生産性とか、効率を求められながら収入を上げていくというところでがんばっています。淡々とした作業が得意な人ももちろんいます。でも、創作的な活動をするのがらっと顔が変わるんです。「やみつきだわ～」という利用者さんの言葉が心に残っています。(桜庭幸恵／ワークセンターかじま)

本展は、高橋孝治がディレクターとなり、常滑の福祉施設やそこに通う障害のある人たち、製陶業に関わるつくり手たちとともに実践したもののづくりのプロセス・成果から構成。会場を覆う土壁の印象的な質感を生かしつつ、すべての素材となる原土を中央前面に置き、その周囲に常滑の製陶業における代表的な製品や、各所とのコラボレーションから生まれたタイル、染料、布、紙などを配した。

また、会期中には、陶芸家とともに会場中庭にて「土器焼き」を行い、1日かけて土から土器へと変化していく工程を見せた。



福祉とアート。ぼんやりと気になっていた両者の親和性について、確かな手応えを感じる機会でした。作品からあふれ出る素直でやさしい雰囲気、それぞれの生い立ちの物語を語りかけてくるようで自然と笑顔に。慣れ親しんでいる常滑の土が意表をつく姿で目の前に現れ、それでいて昔からずっとここにあるような懐かしさと安心感で満たされました。アートが人の多様性を媒介するように、常滑の土とつくり手が集い、新たな可能性と出会う場所、ミュージアムがそんな存在になれたら素晴らしいと思います。(尾之内明美／INAXライブミュージアム館長)

常滑における「福祉×伝統産業」という新しい試みの企画であったうに、入口からインパクトがあり「常滑の土、やきもの、土で染めた布」の3要素を象徴的に見せていたのが印象的でした。ワークセンターかじまの利用者さんが手がけたタイル作品も勢いがあり、色の出方も絶妙でその愛らしさにとっても驚かされました！何よりこのテーマの企画を「土・どろんこ館」で開催できたこと、常滑の土の可能性を感じものづくりの一端に触れられたこと、たんぼぼの家のみなさんと知り合えたことが大きな収穫でした。(高橋麻希／INAXライブミュージアム土・どろんこ館)

色んな陶土を染めて漉いて



常滑市内や知多半島、ほかのやきもの産地の土を用いて、知多木綿の晒しを染め、紙に漉き込んだ際のテストピースを展示。素材となる土の色味を生かし、やきものだけではなく素材の可能性を見える形にした。

高橋孝治「わたしのニユートラ」展

NEW TRADITIONAL

滑らかな粘土の床が、丘陵に広がる舞台の上で

日本モザイクタイル(丸安)と利用者さんをつくったタイル



焼き上がった白いタイルに、鮮やかな色の釉薬やパステル、鉛筆型の陶芸用の絵付け道具を用いてワークセンターの利用者が絵付けを行った。その後再び大きなトンネル窯で焼成し仕上げた。粘土製造の丸安・伊奈幸洋さんが計画から焼成までを担当。丸テーブルは常滑焼問屋の丸よ小泉商店からのオーダーで、木工職人の谷本和也さんと高橋さんが協同製作したもの。

タイルとビビッドな色の釉薬を用意して、あとは自由に描いてもらいました。絵付けで一番感じたのは、みなさん描くときの迷いがいいこと。今回は、焼き上がったものをもう1回焼いています。普段は量産していて、やきものの質感や味わいといったものをなかなか出せないのが悩みでもありますが、今回たくさん新しい発見があり、ありがたかったです。(伊奈幸洋／有限会社丸安)

土器焼き

ワークセンターの敷地から掘った粘土を、陶土に仕立てて形づくり、「土・どろんこ館」どろんこ広場にて小さな窯をつくり焼成。会期中に公開制作として耐火レンガを積み、ドーム状の粘土の屋根を被せたなかで焼成する、原初的なやきものづくりの工程を見せた。制作は、陶芸作家・鯉江明さんを講師に、関係者が実施。

土からやきもの変わっていくさまを体感できるのが土器焼きです。素焼きをせずに、乾燥した生の作品のまま焼いています。人が日常のなかで触られる温度帯のなかで火や土の変化を感じてもらいたいです。焼くときに起きる割れのリスクや、どこから乾いていくのか、火に当たるとどうなるのか、そういう変化がよくわかるんですね。(鯉江明／陶芸家)

野焼きというのいろんな定義がありますが、私たちは外で土を焼き固めることを野焼き、あるいは土器焼きという風には呼んでいます。土の素材感とか、土からやきものへの変化みたいなことを意識してやっています。土のドームにだんだん愛着が湧いてくるんですよ。壁に新聞紙の文字がうつっていたり、壁に粘土を当てたからその形が面白かったりする。自分たちが土を焼くことを実感できるのが野焼きや土器焼きですね。(佐藤一信／愛知県陶磁美術館副館長)

水野太史さん(水野製陶園)と利用者さんをつくったタイル



焼き上がった土味のあるタイルと、独自に調査したさまざまな釉薬と泥を用いて、ワークセンターの利用者が絵付けを行い、水野製陶園で再び焼き上げた。建築家・水野太史さんによる常滑新市庁舎の陶壁などの習作、自身の仕事も含め、今回協同製作したタイルの空間構成を水野さん自らが手がけた。

あえて酸化金属の釉薬を選びました。金属の反応で発色するので味わい深い色が出ますが、塗ったときと焼き上がったときの色の変化が大きいです。今後、発色の変化をわかったうえでコラボレーションすると、もっととんでもないことになるはずですが。ファーストコンタクトでここまでのものできるんですからね。デザイナーやアーティストと一緒に制作することもありますが、感覚としてはまったく同じで、今回描いていただいたみなさんも作家として見えています。(水野太史／水野製陶園ラボ・水野太史建築設計事務所)



弊館で行っている体験教室「光るどろんどろん」では道具を使って真珠になるまでタネを削り、色泥でお化粧をし、瓶を使って磨きます。約1時間でどろんどろんに光沢が生まれ大切な宝物に。その宝物のタネをワークセンターかじまさんにつくらせていただいています。今回、どろんこ広場で行った土器焼きでは、光るどろんどろんを4個入れてもらい「光る焼だんご」をつくりました。本の知識だけでなく実際にやってみて学ぶことの大切さに気づかされました。(磯村司／INAXライブミュージアム土・どろんこ館)



期間：2021年1月22日(金)～31日(日)

会場：INAXライブミュージアム土・どろんこ館1階

企画展示室(愛知県常滑市奥栄町1-130)

主催：文化庁、一般財団法人たんぼぼの家

協力：常滑市社会福祉協議会、ワークセンターかじま、デイセンターおおそ、日本モザイクタイル株式会社、有限会社丸安、水野製陶園ラボ、株式会社水野製陶園、鯉江明、TOKONAME STORE、有限会社丸よ小泉商店、梅原タツオ、とこなめ焼協同組合、河合秀尚、TOALHANT、株式会社LIXIL、INAXライブミュージアム

Document

ニュートラ日誌

2020-2021

ものをつくる・伝える・広げる多種多様な担い手たちと
出会い、そのなかで見てきたこと、語られた言葉を、
たんぽぽの家のスタッフが記録していく。

2020.5.21(木)~

実例づくり(春日大社境内の杉)/奈良

暮らしのなかに取り入れられる
商品を考える



春日大社から「障害のある人の仕事につなげてもらいたい」との想いで、「あたらしい・はたらくを・つくる福祉型事業協同組合」へ寄贈された境内の杉を使い、Good Job! センター香芝(以下、GJ!センター)で商品開発を行いました。ディレクションは奈良の高畑にある「空檜」店主の五井あすかさんをお願いすることに。空檜は日常を豊かにする道具と器を取り扱うお店です。神威ある杉材の魅力をどう使い手に伝えるか、“祈りや祝い”の要素を、どのように暮らしのなかに取り入れていくのか。五井さんと商品化の検討をするなかで、行きついたアイデアが燭台と重箱でした。Nakajima Woodturning Studioの中島信太郎さんにウッドターニング製法による燭台の制作を、APPLE JACKの小林清孝さんには楕円型の重箱の制作を協働していただきました。GJ!センターの障害のあるメンバーとも染めやオイル仕上げのレクチャーを受けて、生地の色味や風合いの変化を学びました。(藤井克英)

5.26(火)~6.22(月)

「ニュートラオンライン聞き取り」/奈良

ヒアリング調査を実施

4月に緊急事態宣言が発出され、たんぽぽの家やGJ!センターも一時的に閉所したり、メンバーにも在宅での仕事をお願いしたりと仕事にも暮らしにも変化がありました。そうしたなかで、ニュートラのアドバイザーボードのみなさんがいま何を考え、これから何をしようと思っているのか、それぞれの実践や考えをもとに話を聞く機会を持ちました。全員で集まって話をしたいところでしたが、社会的な状況を鑑みて、オンラインで実施。ライフスタイルが急激に変化したなかでの発見や、Webを活用したチャレンジの構想など、どの方からも前向きな話があったのが印象的でした。(中島香織)

アドバイザーボード: 加藤駿介(NOTA&design 代表)、白水高広(株式会社うなぎの寝床代表)、水野大二郎(京都工芸繊維大学 KYOTO Design Lab 特任教授)、守屋里依(ippo-plus)

6.3(水)~

実例づくり(お蚕さんプロジェクト)/奈良

お蚕さんプロジェクトスタート



GJ!センターでは3年前より蚕を育ててきましたが、今年からはじめて500頭を超える「小石丸」がやってきました。そこから約1ヵ月にわたり、「お蚕さん日誌」をつけ、GJ!センターのメンバーとスタッフで育てました。7月に入りたくさんの繭になり、収繭という繭を収穫する作業に。この間に蚕について学ぶ機会を持ったり、絵やイラストに表現したり、お蚕さんを飼養する京都太秦の「蚕の社」に飼養のお参りにも行きました。7月7日には染織の儀式を行い、蚕のうた「ritual of kaiko」もつくりました。お蚕さんを育てることを通して、養蚕や染織の歴史や文化についても触れる機会になりました。(森下静香)

"My New Traditional Collection" selected by Koji Takahashi

備前すり鉢 一陽窯(木村肇)作/石器、備前ワインカップ 一陽窯(木村肇)作/石器、
備前スパイスミル 播粉木 一陽窯(木村肇)作/石器、山椒
photo: Shungo Takeda

お蚕さんプロジェクト
Instagram



9.19(土)

ECサイトの開設/奈良

商品の魅力を伝える写真

ECサイト「障害のある人の表現とものづくり」の制作・運営をGJ!センターが担当しました。これまで、ECサイト「GOOD JOB STORE」も、メンバーと一緒に制作・運営してきましたが、今回はまったく違うイメージのデザインになるということで、商品写真の撮影方法から見直しました。普段は白いバックで撮影することが多いのですが、撮影担当のメンバー伊藤誠一さんとGJ!センターのいろいろな場所で試し撮りをし、深みのある写真になるように試行錯誤しました。例えば面談室や静養室など、意外な場所で撮影した写真の光の入り方が良かったり、新たな発見がありました。商品ごとに、より良く撮れる場所を見つけて撮影するという体験は、私たちにとって大きな刺激になりました。次に撮影する商品がやってくるのが楽しみです。(安部剛)



NEW DANTSU「えのぐのじゅうたんバナナ」

※本Webサイトは日本財団の助成を受けて制作しました

2021.3.17(水)~3.19(金)

見本市への出店/東京

ててて商談会に出展

昨年度、実例づくりのひとつとして取り組んだ「NEW DANTSU」。「植え込み」という緞通の補修技法を教わりながら、約1年ぶりに、山形の福祉施設からのメンバーに協力いただき制作しました。職員の方からは、米沢緞通・滝沢工場の緞通は地域が誇る産業であること、その一端を担っているということ意識して丁寧に取り組むよう、アドバイスも。そうしてつくられたものをどう市場へとつなげるか。ひとつの試みとして、渋谷で行われた「ててて商談会」に出展。NEW DANTSUのほか、燭台やGood Job!の張り子など、ニュートラでつくったものに触れてもらいながらバイヤーを含む来場者と語り合い、現在のものづくりの潮流やコミュニティと出会う機会となりました。(藤井克英)



リサーチツアー&オンライン報告会の実施

10.19(月)~2021.2.2(火)

事例調査/愛知、福井、オンライン

伝統工芸、伝統産業の産地をまわり、新たな視点でものづくりや発信に取り組む事例を調査し、福祉の現場にも生かしていけるような視点を見出すことを目指しました。また、本来であれば参加者を募って実施する予定でしたが、新型コロナウイルス(COVID-19)の感染拡大の影響のため、事務局(たんぼの家やGJ!センタースタッフ)を中心に少人数でのツアーとし、映像記録を充実させ、後日、オンラインによるトークセッションを実施しました。

リサーチツアー
 ・常滑(愛知県): 有限会社丸よ小泉商店、有限会社山源陶苑、鯉江明さんのアトリエ、有限会社丸安、ワークセンターかじま、INAXライブミュージアム、水野製陶園ラボ
 ・有松・鳴海、尾州(愛知県): ニコニコハウス鶴里、有限会社こんせい、Aya Irodori、cucuri、有限会社絞染色 久野染工場、木玉毛織株式会社、尾州のカレント、未松グニエ文さん、葛利毛織工業株式会社
 ・越前、鯖江(福井県): 山次製紙所、ろくろ舎、丸廣意匠

オンライントークセッション
 ・「焼き物の産地 常滑から考える」
 登壇: 高橋孝治(デザイナー)、前川敏士(アーティスト)、福森創(工房しょうぶ統括主任)、岡部太郎、森下静香
 ・「絞り染めの有松・鳴海、織物の産地 尾州から考える」
 登壇: 彦坂雄大(尾州のカレント代表)、井上愛(NPO法人motif代表)、浅野翔(合同会社ありまつ中心家守会社共同代表)、坂本菜、森下静香、岡部太郎
 ・「和紙の産地・越前、漆器の鯖江から考える」
 登壇: 酒井義夫(ろくろ舎)、藤井克英、図師雅人、平松克啓、森下静香

※リサーチツアー&オンライン報告会は日本財団の助成を受けて実施しました



photos: Hiroshi Kondo

11.26(木)

実例づくり(春日大社境内の杉)/奈良

ものづくりを通して自然との関係を学ぶ



photos: Naosumi Kiyama

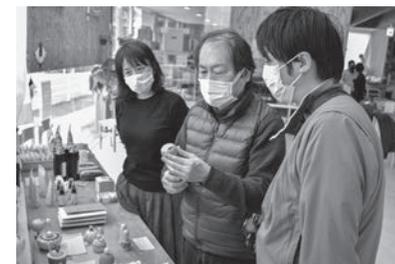
春日大社境内の杉から生まれた商品の完成報告として、春日大社の社殿に燭台や重箱をお供えして、GJ!センターのメンバーや制作に関わった関係者で参拝しました。玉串をささげて感謝の気持ちを伝え、祈ったのは、商品が多くの人の手元に届き長く愛されるようにということ。春日山の傾斜地に建立されている社殿の歴史や建築様式をご案内いただき、豊かな自然との関係性も学びました。燭台とともに販売するろうそくづくりに地元のみつろう素材を使い、和蠟燭に用いる伝統素材と製法を体験しながら商品の制作を行いました。商品をつくる過程でもあらためて地元奈良の豊かな地域資源や、そのなかでものづくりをしている人たちとのつながりが生まれたように感じます。(藤井克英)

3.22(月)

バリアフリーの取り組み/奈良

視覚に障害のある人による郷土玩具の鑑賞

「GJ!センターに山響屋とドンタク玩具社がやってくる」を、美術家で視覚に障害があり、鍼灸師でもある光島貴之さんに鑑賞してもらいました。はじめに光島さんにドンタク玩具社の創作玩具である新型のこけしを触って鑑賞してもらいました。従来のこけしのイメージとは違うさまざまな形や、伝統的なろくろの手法を用いてつくられている技術の痕跡を手で触ることで、こけしをつくる技術も確かめることができました。次に山響屋の全国から仕入れられた木や土、紙などさまざまな素材を用いた郷土玩具を鑑賞してもらいました。郷土玩具は日本の風土や文化から生まれ、厄除けや、五穀豊稔など祈りや願いが背景にあることも多く、そうした背景についても話しながら鑑賞を楽しみました。郷土玩具は、一つひとつにつくられた背景があり、願いが込められています。そうした背景を知ること郷土玩具に触れる楽しみであることを実感しました。(森下静香)



3.24(水)

ニュートラ会議/奈良

つくる・伝える・使う・使い続けることをめぐって語り合う

昨年5月、個別に話を聞いた人たちに、あらためてオンライン上で一堂に会してニュートラの取り組みを報告。この1年を振り返りながら、6名のみなさんの近況をお聞きしました。まず共通してみなさんが感じていたのは、障害のある人がものづくりに関わったり、環境に配慮した素材を使っていたりというような、ものづくりの背景を伝えることは、いまやスタンダードになってきているということ。あるいは、あえて伝える必要すらない場合もあるということでした。

だからこそ背景を抜きにした、ものそのものの力や、一度使われたもの、古くからある技術との組み合わせが目される。それが私たちが立っているものづくりの現在地なのだと思います。では、ニュートラで製作した商品を、地域や地球環境に目を向けながら、どのように価値づけ、発信していくのか。ものを使い続けること、ものの魅力を伝えること、あるいは伝えすぎないこと、もともとあったものを見直すことなど、今後のニュートラを考える上で、たくさんヒントを得ました。(中島香織)

参加: 加藤駿介(NOTA & desin 代表)、白水高広(株式会社うなぎの寝床代表)、永田宙郷(ててて協働組合 共同代表)、水野大二郎(京都工芸繊維大学 KYOTO Design Lab 特任教授)、守屋里依(ippo plus) スーパーバイザー: 多田智美(編集者)

Words ニュートラ 語録

ものづくりに関わる多様な人たちとの議論を通して出てきた言葉の数々。

伝えようとしすぎているのではないか。

— 白水高広(うなぎの寝床)

ものを売るときに、その背景や周辺情報も伝えることが前提となっているいま、ものそのものの力が問われている。産地や障害のある人の関わりなど、ものの周辺情報を伝えることに違和感が出てきたときに、その違和感を許容しながら更新し続けることが、NEW TRADITIONALの、NEWなのではないか。またそのNEWということもどのくらいのスパンでとらえるべきなのかと、自身の活動も振り返りながら問いかけた。(2021年3月 ニュートラ会議にて)

未来はいつも本来のなかにある。

— 永田宙郷(ててて協働組合共同代表)

漆や和紙など、いわゆる伝統工芸はもともと環境負荷が低い。つまり、いまものづくりの世界で話題になっているサステナビリティは伝統工芸にとって、何百年も前から当然のようにあった姿勢だった。人類が未来に求めているものは足元にあった、というのは大きな喜びであるとともに、それをいまの文脈に整えることが、伝え手・支え手・つなぎ手の役割ではないかと話した。(2021年3月 ニュートラ会議にて)

春日大社境内の杉を用いた商品制作の相談で訪問したときに、五井さんから尋ねられたのは、「燭台は使いますか？」ということ。思いも寄らない提案に驚き、そして祈りを何らかの商品として具現化するイメージが湧ききつかけになった。(2020年5月空櫃での打ち合わせにて)

手のひらから生まれる新しい祈りの形。

— 五井あすか(空櫃)

郷土玩具を発注し、届いた箱を開けてみると、ちよつと頭がへこんでいたり、前に見たものよりも太っていたりするものが届くことがある。そういったものが来たときの喜びは何とも言えず、むしろできるだけ、少し違うものを送ってほしいとまで思うと瀬川さん。人がつくっているからこそなされるもの、そこにある人間の魅力を語った。(2021年3月 オンライントークにて)

全然違うものが来たときの「アタリ！」感。

— 瀬川信太郎(山響屋店主)

頭と手が連動していると、グッと仕事になる。

— 酒井義夫(ろくろ舎)

ろくろ舎としての作品制作のほか、個人の表現として器の範囲を超えた仕事を行う酒井さん。福祉と他分野の協働に限らず、知識と身体の行き来の大切さを語った。(2020年1月 オンライントークセッション「和紙の産地・越前、漆器の鯖江から考える—障害のある人の表現と伝統工芸の発展と仕事づくり—」にて)

全員に理解されるといいうのは難しい。うすくならないほうがいい。

— 加藤駿介(NOTA & design)

オンラインを活用した取り組みが増えるなか、あえてその正反對のことをしたかった。滋賀という土地にいる自分たちだからこそのこと、より深く伝えることができるのは何かと考へ、展覧会に合わせて冊子を3冊制作。社内で撮影から製本まですべてを担い、10年後であっても、誰かに見てもらえるのはと期待していると話す。すべての人に向けてではなく、興味を持っている人に届けることができれば、そこから広がっていくと語った。(2021年3月 ニュートラ会議にて)

いびつで自然な状態が人工的につくられている。そこに、新しい美的価値判断のようなものが出てきている。

— 水野大二郎(京都工芸繊維大学 KYOTO Design Lab 特任教授)

ゴミや廃棄物とされていたものも含めて循環させていくことを考えたとき、均質なものをつくることにこだわるだけではなく、不均質で違和感があるものが、かえって愛でられるのではないか。ものづくりのなかで、自然を循環させようと力を注いだ結果、素材がちぐはぐだったり、いびつな感じがしたりすることに、いまや消費者もネガティブにとらえないようになりつつある。そんな状況に、これからの可能性があると言った。(2021年3月 ニュートラ会議にて)

使い続けられるものも、はかないものも、自分にとっては同じ価値がある。

— 守屋里依(ippo plus)

自身のギャラリ―運営を振り返りながら、災害や感染症など、大きな出来事があったときに、それでも人が美しいと感じることに時間を割いたり、心を配ったり、心がふるえたりするのかがどうか試された1年だったと話す。長く使えるものも、食べてなくなってしまふようなものでも、ものをそこに置く、そこにあるだけで世界が変わる。そういったものを自分は届けたいということをより強く感じたと言った。(2021年3月 ニュートラ会議にて)

これからも障害のあるなしに関わらずバリアフリーな温かい絞り染めをしていきたいです。

— 近藤弥栄子(有限会社こんせい)

伝統の有松・鳴海絞を現代の暮らしに寄り添う形で提案し、地元社会福祉法人ニコニコハウスの障害のある人にも仕事を委託している。言葉だけでなく、ジェスチャーや雰囲気でもやりとりを行うことも。障害のある人との関わりから学ばせてもらっていると笑顔で語った。(2021年1月メールにて)

神秘的で落ち着いた感じがしました。私は杉でお重箱や燭台をつくらせてもらってあげがとうございますと心のなかで思っていました。

— 西村麻菜(Good Jobセンター 薔苳メンバー)

燭台などの完成を報告するために春日大社を訪れた後の感想。燭台とともに販売するろうそくづくりを担当する西村さんは、玉串をささげ、本殿に隣接する萬葉植物園でスタッフとともにさまざまな植物が残されている場所にも身を置き、その神聖さを体感した。(2020年11月春日大社にて)

小さな循環のなかで協働し、互いの価値を見出していく方法

収録：2021年2月19日(金)

やまがたアートサポートセンターら・ら・ら
コーディネーター
武田和恵さんに聞く



ただだ・かずえ

1977年山形県山形市生まれ。東北芸術工科大学デザイン工学部卒業。学生時代にたんぼほの家のボランティアに参加したことをきっかけに、山形市の福祉施設で働き始める。2012年から、一般財団法人たんぼほの家、NPO法人エイブル・アート・ジャパンの東日本復興支援プロジェクト東北事務局として、障害のある人の仕事づくり、芸術活動支援事業に携わる。2018年から、やまがたアートサポートセンターら・ら・らコーディネーター。

—山形を拠点とするデザイナー、福祉施設、緩通生産者によるプロジェクト「NEW DANTSU」の取り組みを行うなか、感じたことを教えてください。

昨年から地域の福祉施設や工房でワークショップを実施し、関わる人たちの個性を生かした商品開発を行っています。私は各所をつなぐコーディネーターとして参加。分野を横断していろんな人が関わる取り組みだからこそ、役割の重要性を再認識しました。例えば、デザイナーの提案に対し、福祉施設側は遠慮して「それでいいですよ」と受け入れてしまう。そうすると、なぜ施設の利用者が関わっているのか、この取り組みで何を大切にしたいのかがぼやけてしまいます。いろんな人が関わる＝全員が妥協点を探す必要があるときに、ただその場を丸く収めるのではなく、各々の持ち味をどう生かせるかが重要です。

—活動を行っていくなかで、協働するための課題が見えてきた。

社会と関わるとき、「下請け」に従事することが多い福祉施設は、生産性を求め、正解と不正解、適合と不適合など「ゆらがない」ための基準を設け、支援することがあります。今回、デザインのルールは決めつつも、ゆらぎ・遊びの幅を持たせることができました。また、個々の持ち味を生かしつつ、お互いの価値に気づけたのも大きな成果です。実はいま、彼らの協働が次の商品開発へつながりつつあります。山形の小さな圏内で実現できたことの価値は大きいと思います。

現代が喪失した記憶を取り戻すものづくりにおける利他性

収録：2021年2月26日(金)

一般財団法人たんぼほの家・社会福祉法人わたぼうしの会 理事長
播磨靖夫さんに聞く



はりま・やすお

1942年生まれ。新聞社記者、フリージャーナリストを経て、市民運動として「たんぼほの家」を設立。障害のある人の芸術活動支援に従事し、アートと社会の新しい関係をつくる「エイブル・アート・ムーブメント(可能性の芸術運動)」を提唱。平成21年度芸術選奨文部科学大臣賞(芸術振興部門)受賞。

—コロナ禍において、いま感じていることを教えてください。

「利他性」「利他主義」に気づくようになってきたこと。これはコロナ禍で生まれた新しい感覚です。ものづくりも、自分だけが売れてお金を儲けるということではなく、他人を幸せにする、他人のために祈るといったことが重視されていくと思います。また、自由でいられない状況や死ぬことが急に身近になったいまこそ、新たな思想が生み落とされるときです。室町時代の乱世に、茶道や華道が生じ、それが現世に至るまで残っているように。

—あらためて「NEW TRADITIONAL」とは？

日常生活を取り戻すにあたり、みんなが求めるものは何かとよく考えます。イメージするのは、意味や合理性だけでは説明できない不思議なもの。それがニュートラのつくるものになる。僕は、伝統工芸とは愛と祈りだと考えています。先日奈良で、室町時代の墓から副葬品として小さな犬のやきものが出土したそうです。「形見」とは、愛用してきた人の記憶が、姿が、ものを通して見える、そういうもの。かつては形見も「贈与の循環」の一部だったわけですが、現代の生活からは遠のいてしまいました。思うに、こうした「記憶」の消失が、現代人の生を不安定にさせている。この記憶をどう復活させるのかという点に、今後へのヒントがあるのではないのでしょうか。

ニュートラに関わる実践者に聞く

これからのものづくりを考える4つの視点

「伝統」からこぼれ落ちていく手仕事に目を向ける姿勢・思想

収録：2021年3月13日(土)

ドンタク玩具社/デザイナー
軸原ヨウスケさんに聞く



じくはら・ようすけ

2015年、新型こけし・創生玩具などのデザインプロダクトを開発する「ドンタク玩具社」を設立。従来の郷土玩具の「新しいかたち」を提案している。あそびのデザインをテーマに活動するCOCHAEのメンバー。民藝の根っこを丁寧に辿りながら、今日の美術や工芸のありかを探る近著『アウト・オブ・民藝』(軸原ヨウスケ・中村裕太共著、誠光社、2019)も注目を集める。

—軸原さんは、郷土玩具や民藝などの伝統を伝える活動をされてきました。

いまある「伝統」は、時の流れのなかで勝ち残ってきたものですが、重要なものは、残らなかったものにも目を向けることだと思います。戦前の趣味人や蒐集家は、つくるのをやめていた工人さんを訪ねて、郷土玩具やこけしなどを再製作してもらうことが多々ありました。また、郷土玩具が絶えてしまうという危機感から「創生玩具運動」を起こした有坂与太郎という人もいます。伝統には根ざさなければ、地元の素材でつくられた半分デザイン玩具みたいなものですが、こういうものだってしばらく時間が経つと伝統みたいな顔をしていはず。「伝統とは何か」ということは、これからもっと考えなければいけないと常々感じています。

—ニュートラもその定義を常に議論しています。郷土玩具もそうでしょうか。

「玩具は民藝か」「玩具は工芸か」という議論も盛り上がってきました。言うなれば、現在は「工芸の思春期」のようなもの。ここからどう広がり、分岐するか予想はつきませんが、より広く「工芸とは何か」が問われる時期が訪れつつあるのだと感じています。たんぼほの家の活動を拝見すると、マイノリティの立場から発信することと、手仕事の喜びとが両立していることに驚きます。加えて、それを商品として流通に乗せている。伝統を残すかどうかとは別に、手仕事の喜びを伝えることもとても重要な取り組みだと思っています。

ものをつくり、伝え、届け、使う、これからのものづくりの生態系

収録：2021年3月24日(水)

ブランナー/ててて協働組合
永田宙郷さんに聞く



ながた・おきさと

福岡県出身。金沢21世紀美術館(非常勤)、デザイン会社等を経て現職。「ものづくりをつくる」をコンセプトに、伝統工芸から先端技術まで数多くの事業戦略策定と商品開発に従事。2012年よりつくり手と使い手と伝手をつなぐ場として「ててて商談会(旧ててて見本市)」を共同主宰し、販路まで含めたつくり手の支援と環境づくりを行う。

—主宰されている「ててて協働組合」の活動について教えてください。

2011年に「ててて協働組合」という組織を立ち上げ、文化背景や素材や技術へのこだわりを持ったものづくりを軸としながら、つくり手・使い手・伝手が共鳴し合える場づくりを行っています。その一環として、年1~2回「ててて商談会」を開催しています。コロナ禍で売り手と伝手、買い手の対話や実店舗での販売機会が減っていますが、質感や肌触りなどまだオンラインでは伝えきれないですし、単に利便性や効率性を高めるだけではない生活の道具を大切に考えるバイヤーや使い手が増えてきていると思います。

—ものを販売するにあたって、いま求められていることは何でしょうか。

ものを販売する際に、急ぎ、使い続けるための仕組みや環境を準備するべきだと考えています。これまでは高級店や高級ブランドはアフターケアまでが売りだったりすると思うのですが、これからは普段使いのものでもどう使い続けていけるのかが価値となり、選ばれる条件になると思います。

また、ててての活動では、polyphony(共鳴)とlinkage(縁)という言葉を大切にしてきました。自らの固有性ともものづくりの多様性を維持しながら、自分たちなりの生態系をつくるようにつながっていくということです。そんな、自社だけでなく他社や使い手・つくり手との関係づくりを意識したものがづくりが生き残っていくと考えています。

01 暮らしのなかの ニュートラ



文・森口 誠
(一般社団法人暮らしランブ代表)

我が家のごはんの器はやちむん(やきもの)が多い。毎日使っていると時折18年前に作家さんと軒先に座ってコーヒーを飲んで、窯を見せてもらって、笑った時間を思い出す。光の揺れや、土の匂いや、穏やかな空気感さえも戻ってくる。

旅に出ると、景色の違い、食事の違い、風の匂いの違いが普段感じなくなっている心の部分を刺激してくれる。違いを知ることで自分のなかの曖昧さが広がることになぜか安心したりもする。

時間がどれだけ経っても納得して選んだ好きなものに触れたり使ったりすると、狭まっていく曖昧さを深呼吸とともに広げ直せる。「モノ」が消費する「モノ」から、育てていく「モノ」に変わること豊かさを感じている。

作家に出会うことは旅と似た感覚を味わう。ギャラリーで作品を選ぶとき、喜びがそこにある。背景にあるストーリーではなく、無意識のなかで心を泳がしてドキドキしたものを選んでいる。

我が家に少しずつ溜まっていくコレクション。そこには、障害がある人たちの作品も当たり前混ざり合っている。旅をすることや、作品展に足を運ぶこと



香川の鉄作家の鉄のフライパンと、それで焼いたフレンチトースト、やちむんの器、中ノ畑窯のカップ

で違いがあることの愉しさを何度も再確認する。好きが広がり「もの」を通して人を知り、自分を知り豊かな気持ちで育つ。

素直に好きな「もの」を「選ぶ」ことが暮らしのなかにニュートラを馴染ませる一歩かもしれない。新たな概念が、どのように育っていくのかを愉しみに寄り添っていききたい。

もりぐち ままもと
1983年京都生まれ。園芸会社などを経て社会福祉法人松花苑などに勤務したのち2017年「一般社団法人暮らしランブ」を設立。現在、代表を務めている。

02

自然との交感によって 生み出されるものたち



文・林智子
(アーティリスト)

私は、触覚的な手仕事とニューテクノロジーという一見相反するようなメディアを組み合わせ、人間の持つ感情や記憶、そして人と人とのつながりをもとにした身体性の回復と距離の超克をテーマに作品を制作してきた。

幼い頃に渡ったアメリカの広大な砂漠地帯や二度の大震災の経験は、大自然のなかでの我々人間の存在の小ささと、他者との関係性を無くしては存在しえないことへの心細さ、そしてその見えないうつながりへの愛おしさを私に抱かせ、それらの経験はこれまでの創作の源になっただけでなく、近年は京都の豊かな自然と長い歴史の記憶に触れるなかで、森羅万象の相互的な関連性を意識するようになった。

2020年11月に料理家・船越雅代さんのスタジオ「Farmoon」で行った個展では、食材の欠片で染めた絹布とその糸でつないだウラングラスのビーズ、祖父の記憶を元に制作した鉱石ラジオで構成されたインスタレーション作品を発表した。

どれも19世紀から20世紀のはじめに生まれ、現在は忘れ去られつつあるものたちだが、石や植物などの自然物の神秘的な力



2020年、鉱石ラジオ (Farmoon, 京都)

に人間の根源的なつながりへの希求や祈りを託してつくられたものたちである。私のニュートラはそのように自然物と人間との交感によって生み出されるものたちだ。それらは、私たち人間に見えないさまざまなつながりを再認識する装置として今後より一層必要になってくるものではないだろうか。

はやし ともこ
京都とロンドンで染織を学び、さまざまな国で科学、伝統工芸、料理などの専門家と分野を超えたコラボレーションを行い、目に見えない関係性をテーマに作品を制作。国内外の美術館やフェスティバルで展覧会に参加。

ニュートラ 掲示板



ニュートラのWebサイトでは、Web限定コラムも充実。メニューをクリックすると聞こえる音声もお楽しみください。



事例づくりのプロセスや背景、各企画のレポートやイベントのお知らせなど、さまざまな記事をnoteで発信中です。



プロジェクトの膨大な記録からセレクトした写真を、Instagram (@newtraditional_jp)にて発信。ぜひチェックしてください。

NEW TRADITIONAL PAPER 2020-2021

発行:2021年3月31日 | 発行元:一般財団法人たんぼの家 〒630-8044 奈良県奈良市六条西3-25-4 Tel 0742-43-7055 Fax 0742-49-5501 Mail nt@popo.or.jp | 企画制作・プロジェクトメンバー:たんぼの家(岡部太郎、後安美紀・中島香織・藤井克英・森下静香・那木明美) 編集ディレクション&編集:MUESUM(多田智美・永江大) アートディレクション&デザイン:UMA/design farm(原田祐馬・西野亮介) 展示記録撮影:竹田俊吾 発行・運営:一般財団法人たんぼの家 | アドバイザリーボード:加藤駿介(NOTA&design 代表) 白水高広(株式会社うなぎの寝床 代表) 水野大二郎(京都工芸繊維大学 KYOTO Design Lab 特任教授) 守屋里依(ipigo-plus) 永田宙郎(合同会社ててて協働組合 共同代表) スーパーバイザー:播磨増夫(一般財団法人たんぼの家 理事長) 多田智美(MUESUM代表/編集者) 原田祐馬(UMA/design farm 代表/デザイナー)

[表紙写真] "My New Traditional Collection" selected by Koji Takahashi フック 遊敬 一作/木(傘の柄) photo: Shungo Takeda

本誌は、令和2年度文化庁委託事業「障害者による文化芸術活動推進事業(文化芸術による共生社会の推進を含む)」の一環で制作されました。